

第2章 第1次計画（はとやま健康21プラン・鳩山町食育推進計画）の成果と課題

第2章 第1次計画（はとやま健康21プラン・鳩山町食育推進計画）の成果と課題

鳩山町では、「はとやま健康21プラン・鳩山町食育推進計画」を策定し、8つの健康課題別目標指標と目標値を設定し、健康づくりに取り組んできました。

第1次計画の評価としては、平成25年度実施した町民健康生活アンケート調査結果及び既存の健康づくりに関する各種統計資料等により、目標達成率をみるとともに、行政、関係機関・団体等における取り組み状況とその成果等についてまとめ、最終評価を実施しました。全体としては、「目標値に達した」と「目標値には達していないが改善傾向にある」を合わせ、全体のうち59.3%で一定の改善が見られています。全114項目（再掲項目1含む）についての目標達成度は、以下のとおりです。

■分野別達成状況一覧

分野	目標 指標数	評価区分				
		A 目標値 に達した	B 改善 傾向	C 横ばい	D 後退 傾向	E 評価 困難
食育・食生活	30	1	15	0	14	0
歯の健康	25	1	18	5	1	0
健康診査と 生活習慣病予防	19 (再掲1含)	1	8	2	8 (再掲1含)	0
身体活動・運動	8	0	3	0	3	2
休養・こころの健康	20	2	12	1	4	1
たばこ	5	1	3	1	0	0
アルコール	3	0	1	0	2	0
エイズ・薬物	4	0	1	3	0	0
合計	114 (再掲1含)	6	61	12	32 (再掲1含)	3

*ベースライン値は平成15年度を使用、中間評価（平成21年度）新規に掲げた項目については、平成21年度をベースライン値とした。

上記目標達成度と行政や関係機関・団体における取り組み状況からみた、8つの健康課題における成果と課題は次のとおりです。

(1) 食育・食生活

○食生活をめぐる町民の意識は、ベースライン値と比べると、概ね改善傾向にあります。しかしながら、目標値には達していない指標が多く、より一層の食育の推進が求められます。

- 各関係機関が対象者に合わせた事業を展開し概ね好評を得ています。
- 「1日1回以上家族と楽しく食事ができる子どもの割合」は、乳幼児期は96.1%と改善されていますが青少年期では44.7%と低くなっています。
- 「朝食を毎日食べる人の割合」は高い傾向ではありますが、100%に近づくよう、一層の推進が必要です。
- 壮中年期・高齢期では「町内でとれる食材を利用している人の割合」や「行事食や家庭の味を伝えている人の割合」が後退傾向にあります。そのため、地場産食材の一層の普及・啓発や伝統食や家庭の味を伝える機会を設ける必要があると思われます。
- 「適切な食事量」等の知識の普及・啓発に引き続き努める必要があります。

（2）歯の健康

- 定期的に歯科健診を受ける人の割合は、ベースライン値と比較して、すべてのライフステージにおいて改善傾向にあります。特に高齢期において、その伸び率は大きくなっています。
- むし歯のある子どもの割合は改善傾向にあります。特に1歳6か児においては、ベースライン値に比べ半減しています。
- 町の歯周疾患検診受診率は、ここ数年4～5%前後で推移しており、横ばい傾向です。しかし、受診者からは個別での丁寧な対応への評価をいただいています。
- 壮中年期において、歯や歯ぐきの健康のために注意している人の割合は目標値90%を達成しており（91.9%）、歯の健康に対する意識や行動が以前にも増して高まっていることがうかがえます。
- 乳幼児期は、生涯にわたっての歯科保健行動の基礎が形成される時期であるため、今後も引き続き、幼少時からの歯の健康づくりについて、さらなる啓発活動や取り組みが必要と思われます。
- 歯周病・むし歯予防は、生活習慣病との関連があり、また口腔機能を維持することは、健やかな日常生活を送る上でも大切になってきます。定期的な歯科健診受診の重要性について、さらに啓発するとともに、町が実施する節目検診（歯周疾患検診）受診を促し、受診率向上につなげることが必要です。

（3）健康診査と生活習慣病予防

- 特定健診の受診率は年々上昇傾向にあります。今後も受診を呼びかけ、若い世代からの生活習慣病予防を普及定着させることが重要であると考えます。また、新規受診者の増加や受診継続につなげるための取組が引き続き

き必要と思われます。

- 保健推進協力委員会の協力を得て巡回健康教室、ウォーキング教室などを開催しました。巡回健康教室では、各行政区の特定健診受診率等のデータを示し生活習慣病の予防改善について理解を深めることができました。今後も地区の状況にあわせた健康づくりへの取り組みや関係機関・団体等と連携した取り組みが必要と思われます。

（4）身体活動・運動

- 第1号、第2号公園等の整備により、安心して子どもたちや親子で遊べる公園として認知されてきており、頻繁に利用されています。親水公園も今後親子連れから高齢者までの幅広い年代の人の利用が期待されます。
- 幼稚園開放や子育て拠点施設の充実により、子どもの健全育成を推進することができています。
- 壮中年期における「週2回以上運動習慣のある人の割合」及び高齢期における「歩くことを心がけている人の割合」はともに改善傾向にあります。しかし、壮年期においては運動を意識した身体活動・運動をほとんどしていない人が31%にのぼり、その理由としては、時間的な余裕がないためという理由が一番多くなっています。
- 各学校では、取り組みによって投力をつけるための教具の工夫や業前、業間運動を日常的に促しています。また、安全に遊具等を利用できることにより、児童が運動にいそしむ環境づくりができています。しかし、アンケート調査結果では中学生以上における、授業以外の運動習慣のある人の割合は、ベースライン値と比較すると若干後退傾向にあります。
- 健康づくりサポーターの会が運営主体となり、町内4会場で毎週行われている「地域健康教室」は、気軽に参加できる運動の場として、また地域の交流の場としてもとても好評です。平成25年度の延べ参加者数は7,000人を超えています。
- 多世代活動交流センターにおける、AAAトレーニング教室は平成25年度までで第6期生が修了し、自主グループが7グループ発足し、トレーニング活動を継続しています。
- 運動習慣がある人（週2回、1回30分程度）は、ない人と比べ、循環器疾患や、がんなどの疾患発症リスクが低いことが研究でも明らかにされています。また、高齢者においては、運動機能や認知機能低下を予防し、社会活動性を保つことにもつながります。今後も運動継続のための施設・場の整備とともに、まずは、日常生活の中で気軽に身体活動量を増やせるよう、さらに報の発信等を行い、運動を習慣化させるための取組があわせ

て必要と思われます。

- 幼少期において体を動かすことの楽しさを知ること、また青少年期における運動習慣の確立は、成人後の生活習慣にもつながることから、引き続き体を動かすことへのアプローチ等が必要と思われます。

(5) 休養・こころの健康

- 壮中年期及び高齢期においては、趣味や楽しみ・生きがいを持っている人の割合は増えています。しかし、ストレスがあり解消できていない人の割合も増えている状況があります。壮中年期以降における、ストレス対策への取り組みをさらに充実させていく必要があります。
- 自殺対策庁内連絡会の設立により、町として自殺対策に取り組んでいく体制ができたことで、今後、より効果的な取組が期待されます。今後も効果的な会の運営について協議し、対策につなげていくことが必要です。

(6) たばこ

- 青少年期における調査から、未成年者の喫煙経験者の割合は男女で0.8%と、ベースライン値5.7%から大きく改善されました。特に女性は0%と計画目標値を達成しました。
- 壮中年期・高齢期における調査から、喫煙している人の割合は男性19.9%、女性5.6%とベースライン値からは減っていますが、それぞれの目標値である10%と3%には届きませんでした。
- 喫煙している(していた)と回答した人で吸い始めた年齢を聞いたところ、20歳代が57.8%で最も多く、次いで16歳～19歳が30.4%で続いており、喫煙している人のうち、たばこをやめたい、本数を減らしたい、やめたいけれどやめられないと回答した人は51%、やめるために必要な支援・協力については禁煙(節煙)に関する情報と回答した人が25%でした。
- 青少年期からの喫煙防止教育、及び公共施設内全面禁煙の実施に向けた取り組みが今後も必要です。

(7) アルコール

- 青少年期における調査から、未成年者の飲酒経験の割合が8.3%とベースライン値37.0%、中間値35.7%から大きく改善されました。
- 壮中年期・高齢期の調査では、多量に飲酒する人の割合が21.8%と中間値の7.0%から増加、そのうち禁酒・節酒をしたくてもできない人の割合は7.3%で中間値からの改善はみられませんでした。

- 飲酒している人の8割が、お酒をやめたいと思わないと回答しています。
- 今後も、未成年者の飲酒防止及び適正飲酒についての普及啓発を勧める必要があります。

(8) エイズ・薬物

- 中学生以上19歳以下調査におけるエイズに関する認知度をみると、名前及びその予防法まで知っている人が29.5%と、中間評価時の25%よりも改善傾向にあります。そのうち高校生の認知度は高く、中学生は低い傾向にあります。また、保健所が無料で行う相談や検査については知っている人が35.6%と低く、中学生では96.8%が知らないと回答しています。
- 中学生以上19歳以下調査における薬物使用経験及び薬物を勧められた経験のある人はいませんでした。
- 中学生以上19歳以下調査における薬物に対する印象については、8割が心や体がぼろぼろになる、犯罪に巻き込まれる、悪いことだと回答しています。また、薬物使用による影響の認知度も8割以上と高いものですが、「1回の使用で死亡することがある」については59.8%と低くなっています。
- 学校での性教育や、警察と連携した薬物乱用防止教室や非行防止教室を開催していますが、引き続き、正しい知識の普及啓発の取り組みが必要とされます。

以上の評価ならびに新たな課題については、第2次計画に反映させ取り組んでいきます。